

むすびにかえて―本書成立の経緯―

吉岡 孝

自分が担当していた國學院大學大学院のゼミでは、幕末の長州征討に関する日記を講読していたが、二〇一八年度に一応の区切りがつき、その成果も書籍としてまとめることができた（岩橋清美・吉岡孝編『幕末期の八王子千人同心と長州征討』岩田書院、二〇一九年）。

自分は一九年度はサバティカルをいただいており、二〇年度のテキストは何を選択すべきかを考えていたが、そんな折、新型コロナウイルスにより、世界中がひっくり返ったわけである。

大学院のゼミも延期になり、史料調査に出かけることも不可能になった。あれこれ考えるうちに以前、根岸茂夫先生（現國學院大學名誉教授）から『令聞余響』のコピーを頂戴していたことを思い出した。この史料の主役である中川忠英については以前論文を執筆したことがあった。この人物は何か寛政改革期を考察するうえで重要な人物のような気がしてならなかった。そこで『令聞余響』をテキストにして大学院のゼミを行なうことにした。

自分の恩師である村上直先生は大学院の授業で研究したことを本にするのが方針であった。若い人と一緒に本を作ることに自己研鑽と教育的な意義を見出しておられた。自分もその響みに倣い、ゼミに参加してくれた学生には勉強したことについてレポートに書いてもらい、さらにそれを論文にブラッシュアップして成ったのが本書である。

なお前書の共編者になっていた岩橋清美先生は、二〇二一年度に國學院大學文学部に専任として赴任された。先生にも中川についての著作があり、適任であるため、この本についても共編をお願いし、快諾していただいた。

さらに慎重を期すために、國學院大學文学部史学科の卒業生を中心に結成された学会である国史学会例会でシンポジウムを行なった。国史学会関係者のみなさまにはこの場を借りて改めてお礼申し上げたい。その概要は以下の通りである。

シンポジウム「感情・儉約・制度の江戸時代―『令聞余響』の世界―」

日時…二〇二三年九月三〇日(土) 一三時～

場所…國學院大學渋谷キャンパス 三号館四階三四〇二教室

内容…問題提起

吉岡 孝

中川忠英が編んだ医療関係書

西留いずみ

『令聞余響』にみる中川忠英の交際

井上 翼

『令聞余響』にみる旗本の和歌

村上 瑞木

旗本の家族と家訓

松本日菜子

本書の構成としては、『令聞余響』のテキストを分析した部分を中心に、それを敷衍して寛政改革期に位置づけた部分を追加し、さらに史料の全文も翻刻して掲載することにし、結局三部構成になった。

以下、大学院ゼミで『令聞余響』の報告をしてもらった参加者の氏名を記し、感謝の意を表する次第である。

伊澤直生・伊藤由佳・井上 翼・太田慧子・柊島侑太・斎藤みのり・西留いずみ・布川寛大・松本日菜子・宮澤

歩美・村上真理・村上瑞木

(五十音順)

末筆になりましたが、史料の活用をお許しいただいた根岸茂夫先生には改めてお礼申し上げます。先生には今年三月に大学院を御定年になりましたが、益々の御活躍をお祈りしております。

(二〇二四年五月)